

渡辺よしたかの 1950 年代後半期

— 歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（下）その 4 —

野口 周一^a

^a 湘北短期大学

【キーワード】

台湾 『あぢさゐ』 北海道

はじめに

前稿では、台湾時代からの愛弟子・平井三恭との訣別を、『あぢさゐ』第31巻5月号刊行（1956年〈昭和31〉）のものまでを使用して描き、よしたかの台湾時代からの大きな流れはほぼ尽きたようである。余沢として、台湾時代の歌友で『あぢさゐ』同人として参画している方々の消息という課題は依然としてある。

本稿からは、1956年以降の動きを、『あぢさゐ』を逐次追うことによって、よしたかの歌と生涯を概観していくことにする。

さて、今までに筆者が発表した渡辺よしたか関係の論文は、次の8編である。

- ①「歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品(上)」(『湘北紀要』第30号、2009年)
- ②「歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品(中) —その1—」(『湘北紀要』第31号、2010年)
- ③「渡辺よしたかの戦争詠をめぐって—歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品(中)その2—」(『湘北紀要』第32号、2011年)

- ④「君がため秋白日の香^た煙かむ—花蓮港街に生きた渡辺よしたか・みどり夫妻—」(『人物研究』第28号、近代人物研究会、2011年)
- ⑤「渡辺よしたかの戦後詠(1946～1951)をめぐって—歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品(下)その1—」(『湘北紀要』第33号、2012年)
- ⑥「歌人・浜口英子と台湾」(『湘北紀要』第33号、2012年)
- ⑦「渡辺よしたかの戦後詠(1952～1955)をめぐって—歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品(下)その2—」(『湘北紀要』第34号、2013年)
- ⑧「渡辺よしたかと平井三恭の訣別—歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品(下)その3—」(『湘北紀要』第35号、2014年)

なお、上掲⑥は渡辺よしたかを正面から取り上げたものではない。104歳で長逝した英子（あらたま社主宰者の一人・浜口正雄の夫人）の三回忌を期して成稿、はからずも『あらたま』と『あぢさゐ』を繋ぐ植村蘭花を取り上げることになり、よしたかの蘭花評も収録することができた。

以下、論旨の関係上、上掲論文を引用する際は、①を本編(上)、②を本編(中) - 1、③を本編(中) - 2、④を付編、⑤を本編(下) - 1、⑥を浜口英子論、⑦を本編(下) - 2、⑧を本篇(下) - 3、と順

<連絡先>

野口 周一 noguchi@shohoku.ac.jp

次略称する。

1. 長女・あやめを偲ぶ

長女あやめについて、第31巻6月号には次の歌がある。

れんげ草咲けば亡き兄が感傷にふれて言ひにしことも思ほゆ

これは「山村晩春」と題した一連の歌のなかにある。第一作に「広島の鈴振村は山深み五月四日も桜のこりつ」とあるので、歌行脚の途次に詠ったものであろう。終戦直後、すなわち1947年（昭和22）10月15日に、長女あやめを喪った悲嘆を今もなお詠う。なお「あやめ五周忌」の歌は、本編（下）-1、44頁にある。

次号の「時雨山房雑記」に、「矢野温泉」と題して「広島の福山から、塩町までの、福塩線といふのがある。その沿線に上下（じょうげ）といふ小さな城下町がある。その日は梅雨がふりそぼってゐた。その上下の駅前に、矢野温泉の広告が出てゐるのが目にとまった。バスで二十分位のところしい。ふと旅の疲れをいやしたくなって下車した」とある。

矢野温泉について、矢野村の名勝として『芸藩通志』は「祇園水・霊泉・燕岩」を挙げ、「霊泉は『田間に小高き地あり手温泉出づ、土人或は汲取てこれを浴す。其地に湯寺といへる小堂あり』と記すが、（中略）古くは宿泊施設などはなかったが、第二次大戦後に旅館が建ち、矢野温泉として観光客を集めている」と記している⁽¹⁾。

上下村について、江戸時代は「石州銀の輸送路にもあたり、幕府領の玄関口に相当する重要な位置を占め、市街地の東半分が当時の政治的機能が集中していた」とある。また「明治32年甲奴郡役所が府中村から当村に移転し、幕府領時代からの富豪が軒を連ねて、町は商品取引や金融の面で郡

内の中心的役割を果たした」とあり、相当の賑わいを示した時期もあったようだ⁽²⁾。

よしたかは「城下町」云々と記すが、「元和元年（一六一九）の水野氏入封の折の石高は一千一五一石余」「漸次増加して明治初年には一千一八六石余」「元禄一一年（一六九八）水野氏の断絶により、福山藩領は一時幕府領となったが、同一三年上下村にその代官所が設けられ、以後付近の中心となった」とある⁽³⁾。

そして、「あやめ十三回忌十月十五日」と題する二首もある（第34巻12月号）。

命潤るる思ひせしかどながらへて心気未だも徹せざりけり

初雪の立山連峯橋に消えなべておほほしくすぎ去りにけり

2. 楨有恒^{ゆうこう}の快拳を称える

1956年5月9日、日本山岳会のマナスル登山隊（楨有恒隊長）が、世界第8位のヒマラヤのマナスル（8156m）初登頂に成功した。日本人初の8000m突破であった。第1次登頂隊員の今西寿雄は、「12時30分、私は頂上に立っていた。頂上は狭くきり立っている。南側は垂直の断崖となっていたが、雪がへばりついていた。その雪の上に乗ってみたいような衝動にかられる。ガルツェンは頂上に立つ私をカメラに収めて登ってきた。狭い岩の上でふたりは手をとって喜びあった。足もとの岩場がグラグラと動いて、いまにもくずれてしまいそうに思われ、私は岩の背に馬乗りにならなりました」と記録している⁽⁴⁾。

この快拳は戦後の日本人に誇りと自信を取り戻させるニュースとして大きく伝えられ、さらにネパールと日本との国交が結ばれるきっかけとなったのである。

よしたかは、第31巻7月号に「マナスル征頂」

と題して7首を寄せている。

脚下にはマナスル氷河二股に流れゐる轟も聴
け
威喝してはゞみし山も人間の意志に屈して雲
も退きゆく
神々の座相峭えたる壯観に思ひとゞろき岩上
に立つ
雪庇^{せつび}あやふく残る頂上めざしつゝ男の意志は
燃えて組み伏す
二十年前に聞きしかエヴェレスト日本人なら
遂ぐと言ひしを
快報は敢て頼まずゐたりしが何ぞや今日の早
きニュースは
しゃくれたるかの願禎氏のしゃがれ声あゝ畢
生の業成りにけり

このマナスル征頂の一部始終は、禎の「マナスル登頂物語」に詳しい(『禎有恒全集』第I巻所収、1991年、五月書房)⁽⁵⁾。なお、筆者はよしたかと禎の交友の一場面として、お祝いに駆け付けたよしたかに、禎は「花蓮港の山は美しいですね。そしてあのクロトンの鮮紅色の色と共に忘れられない自然です」と語った場面が忘れられない。よしたかには、

クロトンの生垣の上にある雲の杳かに淡し冴
えかえりつつ

という鮮やかな歌がある(本編(上)48-49頁)。

3. 北海道の旅

第31巻9月号に、「北溟の空」と題して23首ある。その第1首は、

黒きものは大地なりこの薄明の夕空のもとい
づく行かむぞ

である。

この歌については、よしたか自ら解説している。「これは北海道の北の果ての荒寥たる夕べの景で

あります。すっかり日は暮れはてゝ、茫々たる大草原のはてに低く低く丘が起伏してゐます。家の灯も見えませんが、夕焼がして赤く空でも染めてゐる色彩でもあればまだしもいろどりの華やぎと明るさに心暖ることでしたろうが、そういふ夕焼もなく、オホツク海からのガスのため昏々と暗い大地です。わずかにくれ残り余光の空が明るく、その下に黒々としてゐるのは地面であることが判ります。まことに北の果て遠く漂泊し来れるかなの寄るべない孤独感です。然も私はこのうら淋しい地貌の中をどこに行こうとするのであるか、それは旅の計画日程のところに行く旅そのものではなく、一体かく孤独に生きつゝ、ひとりの生命はいづく行き果つべきであろうかといふ生命そのもののゆくえを悲しんでゐるのであります。／人は理想と希望に明るくかがやく場合もあるが、地球がかくして在ること、宇宙がかく存在すること、また生命がかくして在ること、それらを無限に孤独感として感じられることがある。この作品の場合、大地の黒さ、薄明の夕空、そうした事象をとほして、無限複雑なものが純一化され、生命の孤といふものにふれてゐるのであります。このように根源なるもの、真たるものはつねに純一なものであり、複雑多様混沌さは、いつでも純一化されて内容にふれるものなのであります」(『混沌から統一の世界へ—創造主義短歌理論続稿—』『あぢさゐ』第31巻11月号)一。

この北海道への旅について、前月号の「後記」に、夫人の次子は「主人は六月二十四日発新潟秋田の旅を経て北海道へ参りました。帰宅は八月十六日の予定です」と書いている。よしたかは、毎年この時期に北海道を歩いているのだ。

第2首以下も採録しておきたい。

陸は海に没してこゝに国土尽き日は暮れゐた
り^{とき}刻わかぬまに
夜あけなき世界に入るや夕ぐれの下明りする

北溟の空

夕つ日のあかねも染まずオホツクのガス昏^{くら}む
まゝ、すでに夜の闇

はろばろと来果て、北の夏の海いのちまさしく
ひとり^{ひと}なりけり

北の遍土に生きすがりある人々の嘆きの吐息
今共にする

砂丘の草の上にぞオホツクのかく淡き色を言
ひて泣かまく

虚無の海ににんげんひとり対ひ立ちああ一切
は過ぎたのである

鬼哭啾々オホツク海に何も莫しなごさに白し
貝殻の山

湧別の駅長さんに目礼し別れぬあなたも悒悶
の人

白樺の純林なせる沼沢に自生のあやめ切^{せち}に色
濃し

原始林のえぞ松の群暴風雨に倒れしまゝの荒
き枯れごま

産卵にここにも鮭の溯りけむ荒谷川の冽^{ゆき}き雪
解^{しろう}水

雪閉せばわきても暗き梅^{しみ}の繁山の深みを畏れ
ざらむや

原始林の荒き息吹に触るさへや人間愛の遍歴
の旅

目にはたゞ青き山谷るり色の山あぢさゐは何
の慕情ぞ

山深く拓く人あり雪とぞす荒寥の時泣き度か
るべし

鶴ひそむ釧路のひろき草の海天つ日さへや渡
りなづみつ

草丘のたをりに海の見え来しが視角縮まり海
の色無し

くれぐれの大草原に没る陽さへ群れるる牛は
悲しみもせず

焼く雲もなく草原に没る夕陽ただ一痕^{いっこん}の赤と

なりぬる

蒼茫の野となればまた新しき哀傷^{には}の詩を映は
する月

瞬間の中に一切は在るものを没り陽は燃えて
熱く息づく

よしたかは、北海道について「私は毎年夏北海道に行つてゐるが、北海道のどこが魅力かと言へば、自然がまったく文字どほり自然なのであるところがいいのである、荒々しくまことに荒寥漠々として果しない淋しさである。もっとも札幌とか函館、小樽などは、大きな町で、殊に札幌は五十万近い都市でハイカラすぎ近代的すぎるけれど北海道の大部分はまだ未開地が多く、それこそ漠々たる原野、千古ふえつを入れない大原始林である。日本の狭い国土の中に、こうした未開の地が残され、本当の自然を味はへる世界があることはうれしい」と書いている（「時雨山房雑記」一、『あぢさゐ』第32巻11月号）。

ここに「荒寥漠々として果しない淋しさ」とあるが、それはよしたかは台湾でも感得していた感慨である。よしたかに「東台湾旅の回想」と銘打つた「秋風の窓」という一編がある（『台湾時報』昭和四年一〇月号）。ここに「花蓮港海岸」という項があり、「（花蓮港）岸外の汽車沿線」には「池上駅から新武呂、月野大埔駅などあの辺一帯の荒寥さを誰も言ふ。しかしあの荒寥さは台湾独特の持味である。またそれは東台湾の持味であり、疎大さである。そこにはまた、そこでなくては味はへない好きがあるのである。あの様な風趣はどこにも得られない。河原の荒石の中に秋ともなれば真紅の花ともみられる刺うめもどきの実が熟して、いろどりを添へ、都蘭山を遠くに見て広野は見る限りの銀波である」と記していた（付編、115頁）。

加えて、筆者には梅を詠う歌から新高山を想起する（本編（下）-1、47頁）。

4. 親と故郷を想う

第32巻3月号に、よしたかの両親を思う歌がある。

かぞへ歳六十才となりました告げまゐらす
父母のみたまに
足のかたちつくづく母に似たりけりその筈だ
もの母の子なれば
なつかしく思ひ出しては夢にみるご恩返しは
何ひとつせず
ふと写る鏡の中のわが齒なみこの強健は父の
たまもの
夢みては夜半さめて思ふ亡き父も母もいのち
の中にいますを

筆者は、すでに第33巻5月号を用いて、よしたかの「郷関哀傷」というエッセイ、及び歌7首中の3首を引いている（本編（上）41-42頁）。ここでは残余の4首を挙げる。

神仏にかけてまた逢ふその日まで生きて待つ
ぞと宣^のりし祖父はや
まだ生きておはして九十六の媪抱きくれよと
膝をすり寄る
顔見ざりし姉のみたまも足なえの叔父のみた
まもふりてひびかふ
遠くはるかに船より陸におらぶ声ことづけの
品取りに来よとぞ

5. 白木蓮を詠う

第32巻6月号に、よしたかが木蓮を詠う。

たまきはる命そのもの聖ければ月蒼明の木蓮
の花
たましひに何をさゝやく月かげに純白無垢の
木蓮の花
かそけくも囁きかはす木蓮のこの月の夜の幻
聴ならず

想念を滅却しても尚々に漂渺と白し木蓮の花
激情は鎮めよひそむもの燃えよ月かげ包む木
蓮の花

また、第34巻6月号でも詠う。

たとふれば魂魄はかく清浄と夢の如しや木蓮
の花
花と花互^{かた}みに光り放ちつつ白木蓮の無語のさ
さやき
悠遠の過ぎゆきここにとどまれや光り惚^てけて
白し木蓮の花
ひと山の松にこもらふ風音^{かざおと}にそよぎにけらし
木蓮の花
陰微なるいのちの扉^とをもひらくべし笹むらか
げの白き木蓮
青苔に早春の陽は面映^{おもは}ゆしわが吐く息は苔に
吸はるる
夕かげの濃くなるにつれ浮きたちてすでに名
残りの山ざくら花
金剛山はいづく吉野の山は昏れきわ立ちて白
し山ざくら花
簇^{やじり}もて彫りたる文字は目底^えに杉の繁^{まなぞこ}み暗^しし
せらぎの音

ここで、よしたかの弟子が木蓮を詠い、それをよしたかがどのように評価しているか、みておきたい。「木蓮讃頌」において（第33巻7月号）、よしたかは「伊藤松恵さんは、毎年木蓮の傑作を見せてくれる。非常に優秀作といふよりも五月号扉作品の如きは神品に値するものである。即ち芸術作品として、詩としての最高の到着を示すものであった、この作者の仕事に何としても一言費さずにはゐられぬ感銘から書くことにした」と述べる。ここでは5首を挙げている。

まず「情熱のながれひたさむに木蓮の 花の美神は白きながし眸」を挙げ、「実に豊満な情感であり、充実した詩情である。ながれひたさむ、には尚象徴美未だ熟し切れぬものを残してゐるが、花

の美神は白きながし眸は、実に素晴らしい構成である。意識すると、心に熱い情感を抱きその熱きものを木蓮の花にふるることによって、と解きほぐされまたは花と共に一層燃えて溶け合ひたいものだけに木蓮の白の清浄さは、作者の中の情感にはかかはりないもののように冷酷にしづかにそこにあった。といふのである。一体詩とふものは、作品の価値を検討する上の参考までにここに説明を加へることにしたのである」と述べる。

第4首「わが亡骸恍惚と横たふ木蓮の 花のうてなは白磁のかがよひ」については、「ここで恍惚とよこたふ、にはまだ熟成の足りなさがある」と、第5首「耽溺をめぐるまほろし木蓮の 花の座に顕つ月光如来」については、「詩美的な亢奮は宗教的神秘感、壮厳感にまで発展して来てゐる。然し一句の耽溺は過剰である」と、批評している。

筆者が、よしたかと白木蓮で思い起こす歌は、「春愁」と題した18首である。これは「春愁一連の歌は亡き岩満知恵との恋愛事件である」(本編(下)-1、42-43頁)。冒頭の一首のみ再録しておく。

おもひでははるかにおぼろ夜のほの青白き木蓮の花

上掲の弟子の歌への批評を踏まえて、よしたかの「春愁」の一連の歌を鑑賞するといかがであるうか。

6. 台湾日日新聞の縁故

第32巻10月号の彙報欄に、「愛光新聞について」という記事がある。そこには「あぢさゝ会員には台湾の縁故の人が多いため、愛光新聞についてお知らせします。この発行者は、私の新聞記者時代の大先輩恩師で大沢貞吉先生であるが、先生は台湾日日新聞の主筆兼編集局長として令名あり、高潔清廉の士で台湾に在住してゐた人々の心をつなぐための機関紙のようなものです。台湾から帰った

人々の消息がよくわかり、またできるだけ台湾の事情がかかげてあり、毎月東京で、台湾の会といふ催しをつづけて居られます」とある。

そして、次号(第32巻11月号)に、「大沢先生」と題する歌7首が載る。

峻烈の気魄はもとなゆく水のおのづからなる
韻き幽けし
格りたまふこの晩年のしづけさやなほ清冽の
わきて流らふ

これを着よ髪をとけよとみ手づからつぶさに
心そゝぎ給ふも

雑貨屋にビールを買ひて携げたまふわれは氷
をさげて従ふ

先生もわれもランニングひとつなりビールを
ほして歌はんぞいざ

新開地あき地の草の夕風のはつかに沈みてす
でに秋なり

くれぐれの町の辻にぞ握手して滋潤のおもひ
ふかくとどめむ

よしたかが放蕩を極めていた時代(本編(上)44頁)、大沢はそこで出会った上司であり、恩師ともいふべき存在であったことが窺える。

7. 「蟻の街のマリア」北原^{きと}怜子を称える

第33巻3月号に、「アリの町の聖処女北原怜子さんに捧ぐ」として6首を詠う。

神の心行ふものひとりここにありうら若くして
召されたまひき

貧困の群に投じてうら若きをとめ凛々しく神
と共に行く

大浦の聖マリア像目にうかび怜子さんの顔の
上に重る

みむねには聖き愛みつまをとめの度ましやか
のみみしづかなり

二百円うばひ老婆を殺したる君も読みしか怜

子さんの記事

まをとめのままに道にぞ殉じたるすがすがしさはあなあはれあはれ

そして、よしたかは「時雨山房雑記」で「一月二十六日、大分の駅前工藤旅館のいぶせき一室で、毎日新聞の『マリヤさんはいない』の記事を読んだ。話の主は高崎経済大学教授北原金二氏の二女、怜子さん（二八）のことである。浅草のアリの町といふ貧民窟に若い身空で単身とびこんで行って、まづしい人々を慰め、その人々の中にとけこんで神の道を説き、かくて八年間、たしかに心身に異常の無理か疲労かがつみ重なったのであろう。二十八才で夭折したのであった」、「勿論この人は神の道に生きるカトリック信者であったが、物欲にばかり走ってゐるこの頃の若い人々にくらべて何といふ美しくも涙ぐましく尊い話であろう。私はこの一事で世が清められたようにすがしさを感ぜ、且つひと夜さこの怜子さんのために祝福をささげた。まさにそれは神と共にある怜子さんであった。また神は怜子さんを通じてそこにあきらかに生きたまふ姿なのであった。その写真がかかげられてゐたが、いかにも日本のつつましかな娘さんであり、いつか長崎の大浦の天主堂でみた聖マリヤ像を思はしめる。どこか弱々しい美しさであった。こんども長崎に行くので、もういちど見くらべてみたいと思つてゐる」と北原怜子に捧げる一文をものしている⁽⁶⁾。

筆者には「演劇人・松井桃楼とうると台湾、そして蟻の街」という一編がある（『今を微笑む—松居桃楼の世界—』所収、溪声社、2014年）。その「おわりに」において、「1950年代、松居は蟻の街で北原怜子に出会う。彼女の実践は松居によって『蟻の街の奇蹟』と呼ばれた。東京都は、バタヤさんたちを『彼等は浮浪者であつて、疫病と犯罪の巣であり、かつ都市の美観をそこねる』という理由で、彼らの掘立小屋を焼き払うという決定をする。松居は彼

らが自助努力して生活していける代替地をと、幾度も幾度も都に陳情・交渉した結果、それを実現させるのである。その実現にいたる過程の根底に北原の『祈り』があることを説き、それを松居は『奇蹟』と呼んだのである。ここに松居の脚本家・演出家としての面目躍如たるものがある、と考える。また、松居は北原の生き様を目の当たりにして、改革と何かということを実証したのであった」と結んだ⁽⁷⁾。

因みに、「大浦天主堂」の歌5首を挙げておく（第33巻4月号）。

ことば絶ち息をも断ちて神気よりおのづかなる微光放つも
閉づるともなきまなざしや引きしまるともなきみ唇の聖マリヤ像
幽暗のみ堂に落つるウインドの五彩を踏みてすでに聖しも
柔和なるゆゑこそ沁みてたましひにふれ給ふなり愛の権化は
やはらぎははかなきまでの面ざしをつくづくにわが仰ぎ上げつづ

8. 「皇太子御婚儀に捧ぐ」

1958年（昭和33）11月27日、皇太子明仁と正田美智子の婚約発表が行われ、「『平民』出身者との婚儀は皇室の歴史においてはじめてであり、それまで警察官職務執行法（警職法）反対運動を盛り上げてきたマスコミの関心は、一挙に皇室に転じた」という状況になった⁽⁸⁾。

第34巻3月号は、その巻頭に「天地讃頌」として、標題のもと18首を挙げる。

天をうづむるあや雲か花か渺渺と湧きてひゞかふ讃頌のこゑ
らんまんと桜さく国日本の古き歴史は転回をする

全国土さくらの花はさきあふれ自由と愛のか
ねぞひゝかふ

勲一等宝冠章をおん胸に皇太子妃よ高貴にす
がしき

地上には萬花さきそひ鳥うたひもろ人の胸に
春還るなり

世界中が今日のあなたの出発を仰ぎたたふる
春の黎明

自己の意志つらぬかれたる皇太子のあなたは
歴史創造の人

選択の自由つらぬきし勝利者の皇太子殿下見
直し申す

平民の中から妻を選ばれた歴史は破られ歴史
はじまる

これにより永き因習破られて花ひらく明るき
明日の約束

あなた方お二人より人間の自由の尊厳示し給
へよ

愛になやみ真理のために戦ひて深め給へよ人
間とは何ぞ

青年諸君皇太子にぞあやかりて清純一途の愛
をつらぬけ

お二人の自由の意志を押し通し斯くあるべか
る生きをなされよ

両陛下はた妃の君のふた親のむねに燃えよや
人間の愛

日本の新しい出発こゝにありいさぎよきかな
ハロープリンス

おろかなる賢しらどちよお二人の自由の生き
を盲目にする

よしたかの歌に見られるように、「マスコミ、な
かでも週刊誌は、〈軽井沢にめばえた恋〉〈ご自身
で選ばれた〉〈才女〉〈現代のシンデレラ〉という
点を強調し、それを通じて〈皇室の開花〉〈若い日
本の象徴 民主化する皇室に親しみ〉〈さわやかな
なゴールイン生かした憲法精神〉など、新たな天

皇制への親近感や、結婚は両性の合意のみによっ
て成立するという新憲法の結婚観との合致を訴え
た」ことが奏効したのである(前掲書、102-103頁)。

両陛下は若かりしころは庶民から軽んじられて
いた感がなきにしもあらずだったが、近年の談話
から時折り披瀝される歴史認識等は熟成し、見事
なものである⁽⁹⁾。

9. 台湾の山の歌

第34巻12月号に、「亦恋ふる台湾の山」と題す
る12首がある。

敗戦の怨みに燃えて恋ふらくは新高山塊に息
吐きし日を

他界より来る幻聴にあらずして陳有蘭溪の
陰々の音

頂上は逆光暗くのしかかり挑まむとして武者
ぶるひせし

峻峭を刻々染めし朝光の紫のいろ心気にぞ沁
む

水晶蘭採りし幽けき木邃さも杳杳として秀姑
巒山

高砂族諸君の悲劇なげけどもシルビヤ、モリ
ソン、雪にかがやく

渾身の血しほは湧きて喚びたる大山塊の瑠璃
の峻峯

雷気罩めうなりそめたる山稜の孤独の思ひ今
もつづけり

高度計持ちしたなぞこの冷たさもまざまざと
して二十年前

千仞の谷の滑岩にずり初め魂消たりしは今も
動悸す

秀姑巒マボラス大覇シルビヤも新高に立つわ
れに従がふ

雲烟のかなたや南支那海の淡き色さへはた夢
幻なり

註として「陳有蘭溪谷、新高山の下を流るる溪流」「シルビヤ一次高の蕃語」「モリソン—新高山の蕃語」「秀姑巒、大霸尖山、共に山岳の名称」が付されている。

何故、ここで台湾の山岳を詠うのであろうか。

よしたかは、戦時中には1944年(昭和19)秋に(『台湾』第6巻第1号掲載、本編(中) - 2、82-84頁)、戦後も第26巻で「新高回顧」「大関山」「復唱合歡奇葉山縦走」を詠った(本編(下) - 1、44-52頁)。

よしたかにとって、台湾の山岳は北海道ともに大きなテーマである。

10. 三女・しぐれの歌

第34巻12月号に、渡辺しぐれ(現在:中嶋しぐれ)の歌が載っている。しぐれの生まれは、昭和22年11月であるから、中学校1年生の時の歌である。

宿題をすませて縁に出てみたらくらい花壇に
こおろぎの声

床の中窓たゝく雨やかましくついにねむれず
あきて窓見る

しぐれによると、「父はこの歌をことのほか喜んでくれた」と述懐している。また、しぐれは父とともに結核病棟での歌会にも付いて歩き、歌を詠む死刑囚とも文通していたとのことである。そのあたりも、次号で明らかにしておきたいと考える。

おわりに

本稿は1956年から1959年までの『あぢさゐ』を年代順に整理しつつ、テーマをあげてまとめたものである。

今後は1960年以降のよしたかの歩みを検証しつつ、よしたかにとって台湾は何であったか、戦

後の諸活動は何に起因するのか、究明していくことにする。

註

- (1)『日本歴史地名大系』第35巻〈広島県〉、平凡社、1982年、211頁。
- (2)『角川日本地名大辞典』第34巻〈広島県〉、角川書店、1987年、438-439頁。
- (3)『日本歴史地名大系』第35巻、209頁。
- (4)原田勝正『昭和の歴史』別巻〈昭和の世相〉(小学館、1983年)203-204頁より転載。
- (5)同全集所収の「月報 1」には、松田雄一の「植さんのデモクラシー」が収録されている。そこに「植さんに率いられた十一名の第三次マナスル登山隊は、六十二歳の植隊長は別格として、四十三歳の小原さんから、最年少の日下田君と私の二十五歳まで、縦につながる年齢構成であった」、「しかし植さんは、常に私のような最年少の隊員も、メンバーとして平等に扱ってくださった。加藤君!!松田君を下請けに使ってはいけませんよ!!、のように、指示についてはいつも、隊員と一対一に行われ、大学山岳部で縦系列の命令系統に慣れ、そうした環境で育ってきた私などにとっては、年長者と平等に扱われることには、むしろ戸惑いを感じた程であった」、「このようにリーダーの植さんの心の中には、常にデモクラシーの精神があり、そのためか植さんに率いられた隊は、チームワークのとれた実に楽しい登山隊であった」——筆者はこの箇所を読み、田沢義鋪、下村湖人が心魂を込めた青年団講習所の講師に、植を招聘していたことを得心したものだ。
- (6)鳥羽耕史は、映画『蟻の街のマリア』について「賀川豊彦と同じく、第三者として記録する側の固有名が神格化されていく事例として興味深い」と述べる(『1950年代—「記録」の時代—河出書房新社、2010年、36頁)。
- (7)これのもとになった論文は「松居桃楼と台湾演劇」であった(『アジア教育史学の開拓』所収、アジア教育史学会、2012年)。
- (8)コラム1「ミッチーブーム」『全集 日本の歴史 第16巻 豊かさへの渴望』所収、小学館、2009年、102頁。
- (9)例えば、野口周一「美智子皇后陛下の談話に啓

発されて」(『としょかん NEWS』第80号、湘北短期大学附属図書館、2013年)参照。なお、天皇陛下は「平和と民主主義を、守るべき大切なものとして、日本国憲法を作り、(後略)」(平成25年12月18日)と述べられたのであるが、現首相はそれをどのように受けとめているのであろうか。

渡辺よしたかの1950年代後半期

What Yoshitaka Watanabe Was in the Latter Half of the 1950's
Tanka Poet Yoshitaka Watanabe : His life and literary works (Part 7)

Shuichi NOGUCHI

[key words]

Taiwan, *Ajisai* (hydrangeas), Hokkaido